六花

２０１０

平成２２年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

8月号

連（れん）　名人　山田六甲

て　天窓のびびり始めし宵花火

ふ　踏まれたる草立ちもどり花火明け

め　名人の花火は色を抑へあり

づ　図星なり花火の尺を言い当てて

る　流転せる雲を洗へる花火かな

ひ　人帰る方へ花火の闇歩く

め　珍しき人の声する花火かな

ぎ　銀漢と冠せし仕掛花火果つ

み　水際に落下して来し花火殻

の　残し来し父気にしつゝ花火仰ぐ

PDF= 俳誌の salon

す　するすると煙のぼりぬ昼花火

み　道狭む花火出店の埃たつ

た　田に風の出てゐる盆の揚花火

ま　満天を砕く打ち止め花火かな

ふ　ふうはりと昼の花火の落下傘

か　片肌を脱ぎて花火師憩ひけり

た　たちまちに花火の客で埋まる橋

は　初盆の供養の花火揚げにけり

ら　落城のかくもありなむ遠花火

に　ににこにこと花火見上げて耳遠し

PDF= 俳誌の salon

雪華抄（せっかしょう）　青田　ことり

て　手土産の鰻に子らの起こさるる

ふ　拭き上げて網戸涼しくなりにけり

め　めりめりと地を踏み歩く炎天下

づ　厨子の戸の番（つがい）を染める西日かな

る　留（る）記（き）綴る尼僧衣（え）に透く素足かな

ひ　引潮にとろけてゆける夏落暉

め　目配せを交はし祭の場を離る

ぎ　吟醸を切子に注がば遠花火

み　みしみしと軋む床板盆帰省

の　納涼や楊貴妃絵図の絹団扇

PDF= 俳誌の salon

す　墨の香を涼しみながら擦りゐたる

み　嶺の背に夏の落暉の名残かな

た　絶え間なく波は打ち寄せ終戦忌

ま　まなじりのほくろを照らす夜店の燈

ふ　深々と籐椅子に身をあづけをり

か　飼ひ猫を褒めればトマト捥ぎくれし

た　田水沸く稲の力を試すごと

は　翅音を壁にぶつける夜蝉かな

ら　乱雑な部屋に風鈴聞こえ来し

に　肉厚の筆なる残暑見舞かな

PDF= 俳誌の salon

夢風撰巻頭

草刈や野面に甘き風の吹き　田尻　勝子

葉桜に破れ提灯ありにけり

陽炎にバス一台の呑み込まる

夏兆す猫は毛玉を吐き出して

道具屋の鏡に騒ぐ若葉かな

くさかりやのづらにあまきかぜのふき　たじり　かつこ

草を刈る野原を吹きくる風の匂いが甘いというのである。たしかに草を刈ったあとの匂いは甘い。その嗅覚をしてするどく俳句に呼び込んだ。野面という響きもどこか郷愁を含んで相乗効果をもたらしている。掲句は読者の甘味に飢えた記憶を呼び戻させる。戦中戦後に生きた人たちには、糖分に飢えた記憶が刻み込まれている。唐黍の茎を食む牛にさえ微かな甘味を嗅ぎとっていたような気がするのである。草々を傷つけた匂いは、甘みだけではなく、今で言う青汁とは違った様々な匂いが混じっているが、ここでは甘い匂いを抽出して一句に結晶させたのだ。

PDF= 俳誌の salon

雪　卿　集

白　頭

松本文一郎

晩霜や土留の杭の白頭
花片の落ちて流れの速まりぬ
見えねども谷（やと）の水音春深し
酒蔵の白壁に翳春深し
有縁無縁線引きならぬ花祭

蕗を煮る

貝森光洋

蕗を煮てグツグツ蕗の愚痴を聞く
文明のこの世の中に天瓜粉
木造校舎窓いっぱいに風薫る
水すましスローな人生歩みたし
現るも消えるも無言虹かかる

PDF= 俳誌の salon

雪樹集（せつじゅしゅう）

志方章子

花屑の鱗のごとく重なれる
下萌の広ごりてをり雨上がり
春雨や賽銭箱をふさぐ猫
嬰の口伸びて縮んで日永かな
草刈の草の切れ端飛んで来し

永田勇

公園の若葉見上げて深呼吸
どこからか嬰の声して若葉風
道端に激しく積もる花の塵
花筏とどまりぬたる川の淵
船笛に我に返りぬ春愁

PDF= 俳誌の salon

蛍雪譚　六甲

曲家へ光一筋春ぼこり　　笹村　政子

曲家は鍵形に曲がった家で特に南部地方を中心に見られ、牛馬など家畜と生活を共にしている家。現在ではほとんど見られなくなった建物形式。掲句、春の明るい日差しの外部から曲家に入ったら、映写機から出たような光の筋が射し込んでいる。そのまっすぐな光の筋の幅にだけ春の埃がめらめらとうごめいて見えるのである。北国の人々は家に射し込む一筋の光に春の到来を感じ取っていたのだろう、と昔日に思いを馳せているのである。

晩霜や土留の杭の白頭　　松本文一郎

晩霜は四月から五月初めにかけて降る霜のことで茶畑や野菜などに大きな被害をもたらすことがある。もうすぐ夏になるという頃なので、人々は油断をする。自然はそこをねらい打ちしてくるから怖い。だが自然は自然の営みの儀式のように春の終わりのけじめを付けておきたい気持ちが働くのだろう。春の雪や霜はけじめ好きではある。さて土留めの杭先が霜で白くなっている。その姿はまるで白髪頭のようだというのである。白頭という比喩が格別優れているわけではないが「どどめのくい」という音調がどこか霜の厳しさに対抗しているおじさんのようで、そこはかとない味わいを醸している。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon

六花集　会員作品

五ケ瀬川流一

流水に耳傾げをり杜若

滝壺の天を覆ひし青葉かな

睡蓮の咲き始めたる日の盛り

黒南風や船足早き須磨の沖

薔薇色に染まりてゐたる須磨離宮

菊谷　潔

木の芽風木ごとのかほり立ちにけり

若竹の匂ひに出会ふ雨上がり

若竹に都の春を惜しみけり

仕舞屋も香焚いてをり賀茂祭

山藤の香をもてあそぶ若葉風

PDF= 俳誌の salon